

鉢山で造られた東海道五十三次

木村唐船・作 歌川芳重・画 「東海道五十三次鉢山図会」

(草津市蔵・うばがもちやコレクション)



(部分)

東海道沿いに設けられた53の宿場である「東海道五十三次」は、江戸時代後期になると物語や浮世絵など、様々なジャンルの作品に題材として取り上げられました。今回はその中でもユニークな作品「東海道五十三次鉢山図会」をご紹介します。

資料名にある「鉢山」とは、土を盛った鉢に石や草木、小さな建物・人形などを配して景勝地を立体的に表現したものです。作品には、東海道五十三次の各宿場の名所を表現した鉢山の図が、1ページに1点ずつ多色摺りで掲載されています。鉢山は木村唐船という人物の作であり、それらを浮世絵師・歌川芳重が絵に描き起こし、嘉永元年(1848)に出版されました。

草津の図は「瀬田より石山ヲ見」と題し、茶色で無地の鉢に、旅人が渡る瀬田の唐橋と、峻険で

トゲトゲとした山の頂上付近に石山寺が見える風景が造られています。また、大津の図は「矢橋より舟付」と題し、矢橋から来た帆船が大津の湊の突堤に着こうとする風景が、青地に蛸唐草文様の鉢に造られています。五十三次の全図を通して見ると、名所の風景には歌川広重が描いた浮世絵との類似点のあるものが多いことから、広重の作品を参考にして造られたと考えられています。また、鉢自体も様々な形態で柄や色も異なり、全図を通して同様の鉢は使用されていないのも特徴です。

描かれている鉢山全てを、実際に唐船が制作したのかは判っていませんが、各図から名所の風景がどのようにして造られているのか想像しながら見られる、ユニークでとても楽しい作品です。

(令和4年7月・草津宿街道交流館学芸員 武富みゆき)